

研究ノート

『源氏物語』 第二部の欲望構造

— 『源氏物語』の「欲望」を考える —

伊勢 光*

Hikaru ISE

キーワード：柏木, 夕霧, 妄想, 思い込み, 欲望

Key Words : Kashiwagi, Yugiri, delusion, assumptions, desire

要約

『源氏物語』宇治十帖において恋の欲望は他者の模倣としてしか存在しない。一方、光源氏の若き日を語る第一部においては、男が別の男の欲望を模倣する姿も描かれるものの、それらの挿話は物語の中心にかかわってくるものではない。本稿では「若菜」巻以降の第二部世界において、欲望がどのように存在しているかを考える。

具体的には第二部で描かれる3つの恋、つまり光源氏の朧月夜への欲望、柏木の女三宮への欲望、夕霧の女二宮への欲望を考察した。共通するのは「置き捨てられた女」への欲望であった。男たちは別の男によって「置き捨てられた女」に時に興味を抱き、あるいは妄想をし、さらには意地になって欲望をかき立てていく。彼女の実像は何ら関係がない。男は「置き捨てられた女」に自らの勝手な思い込みを乗せ、欲望していく。宇治十帖の欲望とはまた違う、だが確かに他の男を意識しつつ欲望をかき立てていく様子を看取した。

欲望が他者との関係性の中で生まれるものであることは『源氏物語』全編の中で常に描かれているが、特に第二部では他者が置き捨てた女に欲望は生起するのだということが語られている。本稿ではそのことを立証するとともに、『源氏物語』における欲望を考えた。

Abstract

In the Ten Uji Chapters of The Tale of Genji, love's desire exists only as an imitation of others. On the other hand, although the first part, which tells of Hikaru Genji's early days, depicts a man imitating the desires of another man, these vignettes are not central to the story. In this paper, I will consider how desire exists in the second part of the world after

* 東海学園大学人文学部人文学科

the “Wakana” volume.

Specifically, I considered the three loves depicted in the second part: Hikaru Genji's desire for Oborozukiyo, Kashiwagi's desire for Onna Sannomiya, and Yugiri's desire for Onna Ninomiya. What they had in common was a desire for an “abandoned woman.” Men sometimes become interested in women who have been abandoned by other men, or fantasize about them, and even put their own pride at stake in arousing their desires. Her real image has nothing to do with it. A man attaches his own selfish thoughts to the “abandoned woman” and desires her. It was different from the Ten Uji Chapters of The Tale of Genji, desire, but he could definitely see how his desire was being stirred up while being conscious of another man.

The fact that desire is born in relationships with others is a common theme throughout The Tale of Genji, but especially in the second part, desire arises in a woman abandoned by another. In this paper, I prove this and consider desire in The Tale of Genji.

はじめに ——問題の所在

『源氏物語』において、もっとも衝撃的な文言の一つは、この物語最後のヒロインが実はさほどの美人ではないと語り手によって明言されるところであろう（なお、本文の引用は『新編日本古典文学全集 源氏物語①～⑥』小学館1994～1996による）。

さるは、かの対の御方には劣りたり、大殿の君の盛りににはほひたまへるあたりにては、こよなかるべきほどの人を、たぐひなう思さるるほどなれば、また知らずをかしとのみ見たまふ。
 （「浮舟」⑥132頁）

匂宮は薫の声をまねて宇治の浮舟の住まいに侵入し、想いを遂げる。「また知らずをかし（こんな可愛い女はほかに知らない）」（⑥132頁）と思うほど彼女に夢中な匂宮である。だが、その浮舟は実は対の御方（宇治中の君）には似ているけれど確実に劣っており、さらに大殿の君（夕霧六の君）の盛りの美しさと比べれば「こよなかるべきほどの人」、いわば格段に差がある人だとまで評されるのである（この語り手の信頼性に疑義もあるが、ひとまず措く）。

では、なぜそのようなつまらない女に匂宮は夢中になるのか。すでに神田龍身が詳しく指摘しているが（1）、薫への激しい対抗意識、コンプレックスが浮舟をその実態以上に美しく「をかし」く魅せるのである。ルネ・ジラルールが『欲望の現象学』（法政大学出版局 1971）で提唱した「欲望の三角形」がここでは象徴的に描かれていると言える。

つまり、欲望は自発的に起こってくるものではなく、誰かの欲望を模倣したものでしかありえない。実は欲望する人間にとって「誰を欲望しているのか」は大して重要ではなく、重要なのは「それを欲望しているのは誰か」なのだ。事実、「こよなかるべきほどの」女に過ぎない浮舟に、匂宮は薫（の欲望）を幻視して夢中になっている。そして、この匂宮の欲望がさらに薫の欲望に火をつける。浮舟は二人の激しい欲望に追い込まれて入水を図り、そののち出家するという選択を余儀なくされることになるのであった。

主人公格の男二人が揃って激しく恋い慕うヒロインを、はっきりと「こよなかるべきほどの人」と語ってしまう（あるいはそのような女性をヒロインとしてその後も語り続ける）のは物語にとっても大いなる挑戦であったと思いが、実はあまり魅力的ではない女に激しくそそられていく男たちを通して、「欲望とは模倣に過ぎない」ことを実証しようとする試みは『源氏物語』の中で何度かなされてきたことではあった。

一つ例をあげれば「紅葉賀」巻における源典侍がそうであろう。もちろん、源典侍には固有の意義があることは論を俟たない。これまでも巫女、シャーマンであると論じられてきたり(2)、「老い」(3)や「典侍(≒内侍)」(4)という観点から、様々な考察がなされてきた。ただ、「目皮らいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそそけたり」(「紅葉賀」① 337 頁)と描かれる源典侍に一人の女として一定以上の魅力があるとは言い難い。光源氏との関係も「かうさだ過ぐるまで、などさしも乱らん(これほど年を取ってまで、どうしてこんなに乱れているのだらう)」(① 337 頁)という、光源氏の侮蔑交じりの好奇心から始まったものであった。その関係を「頭中将聞きつけ」(① 339 頁)、頭中将の欲望が喚起されてはじめて、二人の恋のさや当てが始まっていくのであった。

ただ、この「欲望の三角形」は徹頭徹尾戯画的なもので「ただいみじう怒れる気色にもてなして」(① 342 頁)「恐ろしげなる気色を見すれど」(① 343 頁)のような演技や「ほとほと笑ひぬべし」(① 342 頁)「えたへで笑ひぬ」(① 343 頁)のような笑いに満ちており、さほど真剣な競い合いではない。さらに『新編日本古典文学全集 源氏物語』の頭注が「源氏と頭中将の関係に移り、当の典侍は置き去られていく」(① 343 頁)と解説するがごとく、男同士が連帯とともによき好敵手関係を確認しあっていくようなホモソーシャル的文脈に収斂されていく。高橋和夫が述べるように「筋の発展に何等寄与する物語ではない」(5)挿話に過ぎず、少なくとも見えやすい形では物語の中心には食い込んでこないのである(6)。「欲望の三角形」から女(浮舟)の問題を語り出そう、しかも死や出家まで見据えて語り出そうとし、そこからの物語の中心に据える宇治十帖の有り様とは相当に開きがあると言わざるを得ない。

青年光源氏を描く『源氏物語』第一部の世界でも深刻な三角関係はあった。いや、深刻な三角関係に満ちていると言うべきだろう。藤壺をめぐる光源氏と桐壺帝の関係はその最たるものだし、若紫をめぐる光源氏と兵部卿官(若紫父)、朧月夜をめぐる光源氏と朱雀帝の三角関係なども

緊張感に満ちており、どれも第一部世界で大きな意味を持つ関係性であろう。時にそれらの三角関係は物語の中心にもなっている。だが、それらの関係はすべて欲望される女君に相当の魅力があった。浮舟のような東国生まれで受領階級の「こよなかるべきほどの人」とは相当に異なっている。やはり、第一部の世界と宇治十帖の世界とは大きな差異があるとまずは考えられる。

となると、やはり宇治十帖の世界はそれまでの『源氏物語』の世界観からは隔絶したものなのだろうか。

欲望の対象となる女君は実はさほど魅力のある女ではない。にもかかわらず男たちは「欲望の三角形」の機能によって、激しく恋をしていく。かつて筆者はそれを玉鬘をめぐる男たちの上に見た(7)。詳しくはその旧稿に譲るが、玉鬘もまた紫上と比べれば明確に劣る女君として本文中で複数の登場人物によって繰り返し明言されていた(8)。そんな彼女が欲望されるのは光源氏を作り出した六条院世界、いわば多数の男たちが欲望を模倣しあう世界があってこそのことであったのだ。その意味では、例えばこの「玉鬘求婚譚」は宇治十帖の世界を髣髴とさせる、いわばその前触れであったと考えられる。

とするならば、では「若菜上」巻以降、いわゆる第二部世界では欲望はどう存在するのかということが問題になってくるだろう。第二部世界において欲望はどのように描かれるのか、そしてその描かれ方は宇治十帖の世界へどのようにつながっていくのか。最終的に『源氏物語』は欲望なるものをどのように捉えているのか——。本稿はそれらを明らかにしようとするものである。

1. 光源氏の欲望構造 —— 朧月夜に対して

「若菜上」巻。准太上天皇として権勢を誇る光源氏は、兄の朱雀院から女三宮の降嫁を受けることになった。しかし、そもそも当初源氏はその縁談に消極的だった。女三宮は「浅からぬ絆」(「若菜上」④40頁)になってしまうと認識し、内々に話を受けても「みずからは思し離れたるさま」(④40頁)と、それを忌避する姿勢は明白であった。それが結婚へと決定的に傾いたのは、朱雀院が夕霧の名前を出した時のことであった。

「権中納言などの独りものしつるほどに、進み寄るべくこそありけれ、大臣に先ぜられて、ねたくおぼえはべる」と聞こえたまふ。「中納言の朝臣、まめやかなる方はいとよく仕うまつりぬべくはべるを、何ごともまだ浅くて、たどり少なくこそはべらめ。かたじけなくとも、深き心にて後見きこえさせはべらんに……」 (④49頁)

夕霧が独身であったら女三宮と結婚させたのと言う朱雀院に、「彼は真面目だが万事にまだ浅い」とすぐに言い返す源氏は、父親としての謙遜にしては言葉が過ぎていまいか。恋のライブ

ルの評価を下げんとする男の言辞になっている面が感じられる。この会話以前から源氏の脳裏には、女三宮は藤壺の縁者であり美しい姫君だろうという好色心はあったわけだが、その好色心が「まめやかなる」夕霧の存在によって増幅される。源氏は結局、続く言葉で「深き心にて後見」、つまり結婚を約束してしまうのだった。

しかし、肝心の女三宮はいかにも子どもめいた少女に過ぎなかった。

いといはけなくのみ見えたまへば、よかめり、憎げにおし立ちたることはあるまじかめりと思すものから、いとあまりものはえなき御さまかなと見たてまつりたまふ。

〔「若菜上」④ 63 頁〕

この様子では憎らしく我を押し通すようなことはないだろうと、その点は安心するものの何とも冴えない有り様に源氏は失望を抑えきれない。

そんな光源氏の欲望の矛先は朧月夜に向けられていく。朧月夜は「姫宮の御事をおきては、この御事をなむ、かへりみがちに帝も思したりける」(④ 76 頁) とあるように朱雀院が女三宮の次に気にかけていた女君であったが、出家する以上は俗世に置いていかねばならない。いわばその「置き捨てられた女」に、源氏の欲望は燃え上っていく。女三宮が望むような大人の女性ではなかった分、その代償として別の「置き捨てられた女」、朧月夜を求めたのである。

かうのどやかになりたまひて、世の中を思ひしづまりたまふらんころほひの御ありさまいよいよゆかしく心もとなければ、あるまじきこととは思しながら、おほかたの御とぶらひにことつけて、あはれなるさまに常に聞こえたまふ。 (④ 77 頁)

朱雀院との夫婦関係を終えてのどかに暮らしているであろう朧月夜のことを思うと、いよいよ詳しい様子が知りたく、じれるような思いに駆られる光源氏。早くも恋の情念に取りつかれていると言っていだらう。あってはならないこと、と自制されながらも情感のこもった手紙を送らずにはいられないのである。

ここにあるのは、前の男(朱雀院)との関係からいったん離れた女(朧月夜)をもう一度恋の舞台に引き戻し、ともに熱狂せんとする男(光源氏)の強い欲望である。その欲望を担保するのはもちろん前の男の存在であろう。前の男に捨てられて寂しい(女が本当にそう思っているかは不明だが)女の気持ちを慰め、あわよくば捨てた男の色から自分の色に塗り替えてやろうという激情がそこには透けて見える。前の男との関係から卒業して「のどやかになり」「思ひしづま」った女を妄想した上で、その女を自分の魅力で再度、男女の煩悩世界に落としてやりたいという加虐心も男の欲望を支えているのかもしれない。

そのような源氏の激情に接して、朧月夜は、

あはれに悲しき御事をさしおきて、いかなる昔話をか聞こえむ、げに人は漏り聞かぬやうありとも、心の問はむこそいと恥づかしかるべけれ、とうち嘆きたまひつつ、なほさらにあるまじきのみを聞こゆ。(④78頁)

と嘆き、拒否の姿勢を示す。朱雀院の出家を「あはれに悲しき事」と捉えて、一人、(出家を前提に)残された人生を穏やかに生きようとしていたところなのであった。

しかし、源氏の激情は収まらない。朧月夜の拒否の返事を意にも介せず、朧月夜邸に車を向けると押しの一手で居座り、ついに関係を持つことに成功する。朱雀院が在世中であれば到底このような強引なことはできなかつたはずである。朧月夜は「いたく嘆く」(④80頁)ものの「心強くももてな」(④82頁)せず、ついに関係を共にした。日が差し上る「心あわただし」(④84頁)い中、源氏は六条院へと帰っていく。

語り手は「いかでかはあはれも少なからむ」(④85頁)と、二人が交わした思いの深さを語る。しかし、どことなく皮肉めいて響くのは決してうがった見方ではあるまい。朧月夜の姿は「なほらうらうじく、若く、なつかし」(④82頁)く見えたとあるが、それも結局は光源氏の(欲望が見せた)主観に過ぎない。ことさらに変わらないものを昔の恋人に見ようとする視線。うすら寒いものを感じずにはいられまい。

さらに光源氏には手痛い報いが待っていた。この交情は(女三宮降嫁で傷ついていた)紫の上の心をさらに痛めつけ、紫の上の源氏への不信を決定的なものにしたのである(9)。

この報いに光源氏が全く無自覚であったとは考えにくい。逆に言えば、それほどこの欲望が激しかったということなのではないか。男に置き捨てられた女への関心と興味。くわえて、「置き捨てられたのならばまた我が物になるであろう」という思いが源氏をしてこうした愚行へと駆り立てさせたと考えられる。そして、あわよくば「昔を今に呼び戻」(10)そうとたくらんだのだ。

しかし、この交情はつまるところ過去の思い出に甘く浸っただけのことであり、そこから何か新しい所産が得られる質のものではなかった。男から奪ったわけではなく男に置いていかれた(しかもその後、男の後を追うように出家する)女と懐古的な交情に耽っているに過ぎない点、限界もまた明らかであろう。実質、これが光源氏にとって妻妾以外の女君との最後の交情になるわけだが、光源氏の恋の極北とはまさにかくも寒々しいものだったのであった。

2. 柏木の欲望構造 ——女三宮に対して

さて、女三宮の降嫁によって衝撃を受けたのは紫の上だけではなかった。特に柏木は自分も女

三宮の結婚相手候補として認めてもらっていたと思うにつけても、残念な思いをぬぐい切れなかった。

さまぎまの御定めありしころほひより聞こえ寄り、院にもめぎましとは思しのたまはせずと聞きしを、かく異ぎまになりたまへるは、いと口惜しく胸いたき心地すれば、なほえ思ひ離れず。(中略)世の中定めなきを、大殿の君、もとより本意ありて思しおきてたる方におもむきたまはばとたゆみなく思ひ歩きけり。(「若葉上」④ 135～136 頁)

朱雀院にも気に入られていたはずと思うと、光源氏のものになってしまったことが残念でならず、とても諦めきれない。柏木は光源氏の出家を待ち望んでいたと本文にはある。朱雀院が出家の際に朧月夜を「置き捨てた」ことは前項でも見たが、それが光源氏と女三宮の間に起きてほしいと願っていたのである。

しかも、柏木は光源氏の愛が女三宮にさほど注がれていないことを知っている。

「対の上の御けはひには、なほ圧されたまひてなむ」と、世人もまねび伝ふるを聞きては、かたじけなくとも、さるものは思はせてまつらざらまし…… (④ 136 頁)

紫の上の寵愛の前には全く圧倒されているらしい。そんな噂を聞くにつけ、柏木は女三宮のことを思わずにはいられない。「私が夫だったならそんな物思いをさせることはないのに……」などと妄想を膨らませる柏木は、すでに恋の奴隷になっていると言っていいだろう。彼の恋心にはそれなりの理由があったと考えることもできるかもしれない (11)。夫から愛されない不憫な女を自らの愛で包んでやりたい、そういうある種のヒロイックな正義感が彼を酔わせ、突き動かす。その正義感は女にとって、はた迷惑なものでしかないことは言うまでもない。いわば単なる「思い込み」に過ぎないわけだが、その「思い込み」が彼の欲望を根強く下支えするのである。

柏木は折に触れてこの思い込みを強固なものにしていく。

以下、やや長文になるが、柏木の欲望構造がよく分かる箇所であるのでそのまま引用する。

宮の御事のなほ言はまほしければ、「(1) 院には、なほこの対にのみものせさせたまふなめりな。かの御おぼえのことなるなめりかし。(2) この宮いかに思すらん。帝の並びなくならしたてまつりたまへるに、さしもあらで (3) 屈したまひにたらむこそ心苦しけれ」と、(4) あいなく言へば、「たいだいしきこと。いかでかさはあらむ。こなたは、さま変りて生ほしたてたまへる睦びのけぢめばかりにこそあべかめれ。(5) 宮をば、かたがたにつけて、いとやむごとなく思ひきこえたまへるものを」と語りたまへば、「いで、(6) あなかま、たまへ。み

な聞きてはべり。(7) いといとほしげなるをりをりをあなるをや。さるは、世におしなべたらぬ人の御おぼえを。ありがたきわざなりや」といとほしがる。(④ 145～146 頁)

柏木は女三宮の話がしたくてたまらない。親友である夕霧と同車するやいないや、傍線部 (1) 「院には、なほこの対にのみものせさせたまふなめりな」と、噂に基づく現状確認に入る。そして、その噂の裏を取らないまま (2) 「この宮いかに思すらん」と、女三宮の心中を勝手に付度しだし、帝 (朱雀院) が寵愛した姫なのに (3) 「鬱々とされているだろうことは心苦しくてならない」と、強意の係助詞まで用いて妄想上の女三宮に心を寄せていくのである。これらの発言が語り手から (4) 「あいなし」と評されているのは象徴的であろう。完全に常軌を逸した、見当違いの虚妄であることを、この「あいなし」は端的に示しているのだった。

それに対して夕霧は (5) 「父は宮を何かにつけて大変大事になさっていますよ」と冷静に取り成すのだが、正義感に燃えた柏木の耳には全く入らない。(6) 「あなかま、たまへ。みな聞きてはべり」からは「うるさい、黙れ、全部聞いているのだ」というような、かなり激しい叫びが読み取れる。(7) では「大変可哀そうな扱いをしばしば受けているようだ」と推定の「なり」を使って自己の推定 (思い込み) を再び語り、朱雀院寵愛の姫君であったのにと、自らの正義感の根拠として朱雀院 (の「御おぼえ」) を再び出してくる。夕霧に言い返されても思い込みをほほそのまま繰り返すことしかできないのだ。柏木が、自らの虚妄にどれほど強く取りつかれているか分かるだろう。

女三宮の侍女、小侍従に仲介を頼む時もその思い込みは徹底している。

「思へばいとたぐひなくめでたけれど、内々には心やましきことも多かるらむ。院の、あまたの御中に、また並びなきやうにならばしきこえたまひしに、さしも等しからぬ際の御方々にたちまじり、めざましげなることもありぬべくこそ。いとよく聞きはべりや」

(「若菜下」④ 220～221 頁)

光源氏の妻となっていることを「この上なく素晴らしいこと」としながら、「内々には心穏やかではないこともあるでしょう」と付度する。さらに傍線部「不愉快に思うこともきっとあるに違いありません」と「ありぬべくこそ」という、ほとんど決めつけに近い非常に強い語調で迫る。あげくの果てには「私は全部聞いているのです」と言って、自らの恋 (欲望) の正当性を主張するのであった (12)。

このような「あいなき」思い込みによって、彼は結果的に自分を死に追いやることになる恋へと突き進んでいく。女三宮は (貴女にもかかわらず) 年の離れた夫源氏から全く愛されない可哀そうな女。自分はそんな彼女を苦境から救い出すヒーローという思い込みである。実際の彼女に

はさほど苦境という認識はなく、西原志保が言うように源氏を「父親代わりとして受け入れて」(13) いたし、光源氏が自分のところに来れば「月待ちて、とも言ふなるものを」(④ 249 頁) などと「若やかなるさま」で帰りを引き止めることもあったのだが。「男に置き捨てられた女を救う」という柏木の「思い込み」が、この盲目的な恋の全てであったと言えば言い過ぎになるだろうか。

3. 夕霧の欲望構造 ——女二宮（落葉宮）に対して

かくして柏木は盲目的な恋に沈み、死へと突き進むことになる。後に残されたのは妻、女二宮（女三宮の腹違いの姉）である。死を前にした柏木は、さほど愛していなかった妻女二宮の今後を心配する。

いとしもあらぬ御心ざしなれど、今はと別れたてまつるべき門出にやと思ふは、あはれに悲しく、後れて思し嘆かむことのかたじけなきをいみじと思ふ。(「若菜下」④ 281 頁)

自分に先に死なれて妻はどんなに思い嘆くだろう、そう思った柏木は「誰にも、この宮の御ことを聞こえつけ」(柏木④ 311 頁) たとある。彼の罪悪感の強さがなせる業であろう。さらに彼はちょうど見舞いに來た親友夕霧に向かって、女二宮の世話を頼み込んだ。

「一条にもものしたまふ宮、事にふれてとぶらひきこえたまへ。心苦しきさまにて、院などにも聞こしめされたまはむを、つくろひたまへ」(④ 317～318 頁)

高貴な宮を疎かにしていたのは自分も同じであった、と柏木は気づく。だからこそ朱雀院への聞こえを憚り、遅まきながら死後の「つくろひ」を頼むのであろう。しかし、この遺言こそが妻を「無残な運命に追いやることになる」(14) ことを柏木は知る由もなかった。

柏木が亡くなり女二宮邸（一条宮）を弔問に訪れた夕霧は、そこで女二宮の母、御息所と話をする。御息所は柏木と娘との結婚は最初からずっと不賛成であったが、柏木は死の直前、周囲に「妻を頼む」と遺言してくれ、そこは不幸中の幸いであった（「いまはとてこれかれにつけおきたまひける御遺言のあはれなるになむ、うきにもうれしき瀬はまじりはべりける」(④ 331 頁)）と言うのであった。

これを聞いた夕霧は、どこか心が満たされるものを感じたのではないか。柏木は全くよい夫ではなく、遺言で自分（夕霧）に頼み事をしたことだけが「うれしき瀬」だったと言うのだから。御息所は自分には好意を抱いてくれているようだ。自分なら女二宮ともっとうまくやれる、そう思った夕霧は次のように述べる。

「この二三年のこなたなむ、いたうしめりても心の細げに見えたまひしかば、あまり世のことわりを思ひ知り、もの深うなりぬる人の、澄み過ぎて、かかる例、心うつくしからず、かへりてはあざやかなる方のおぼえ薄らぐものなりとなむ、常にはかばかしからぬ心に諫めきこえしかば、心浅しと思ひたまへりし」 (④ 331~332 頁)

表面的には柏木の道心を称えた言葉にも見える。しかし、どうだろうか。夕霧は柏木の女三宮への恋情に、薄々勤づいていた。柏木が「しめりても心の細げ」だったのはその思いゆえとどこかで気づいていただろう。自分は(彼の思いを)諫めたものの、聞く耳を持ってもらえなかった。そういう思いを込めての発言なのではないだろうか。

ともあれ、ここからは夕霧の微妙な心理が見えてくる。柏木の内面を御息所に披瀝しつつ、「彼は結婚に向く男ではなかった」と暴露しているも同然だからだ。「自分は柏木を諫めたのだ」と友人思いの男を装うあたり、夕霧の狡猾さが垣間見える。穏健な既婚者(夫婦生活に強い倦怠を感じているのだが)の立場から、結婚生活に踏みとどまらなかった柏木をどこか見下げて語っているように感じるのうがった見方ではないはずだ。

とするならば、宇治十帖における薫、匂宮の関係にも通じる「親友同士の微妙なコンプレックス」がここにも描かれていることになる(15)。夕霧は激しい思いに身を焦がし、結果死んでいった友人にある種の嫉妬心を抱いてもいたのではないか。嫉妬心を抱いたうえで、その友が現世に置き捨てていった女二宮を欲していくのである。

実際、この後夕霧は女二宮へと強引に迫っていく。「あはれ、げにいかにか人笑はれなることをとり添へて思すらむと思ふもただならねば」(④ 339 頁)と夕霧は女二宮の境遇に同情する。夕霧の思い、欲望というものはそこから芽生えていくように描かれている(16)が、いわば置き捨てられた女に向ける、ある種の「上から視線」がこの恋には横溢しているのである。この夕霧の欲望行為に関してはかつて「寡婦への欲望」という観点から論じたことがあるが(17)、改めて確認するならば女二宮を「置き捨てられた女」「未亡人」(未だ亡くならざる人)として夕霧は同情し、そして欲望していく姿勢が非常に露わなのであった。

例えば、次のような場面。

ほほ笑みたまへる気色にて、

「おほかたはわれ濡れ衣をきせずともくちにし袖の名やはかくるる

ひたぶるに思しなりねかし」とて、月明かき方にいざなひきこゆるもあさましと思す。

(「夕霧」④ 409 頁)

あなたは既に柏木に降嫁し、しかも先立たれて「朽ちた女」になっている。そのことは隠しようもないはずだと、夕霧は微笑みながら男の論理を突き付ける。彼女を無理やり月が照らす方に連れ出すという動作と合わせて非常に強引で、非常に無礼なふるまいなのだが、それも夕霧の心中に「置き捨てられた女だ」という思いがあつてのことだろう。すでに男と肉体関係があり、しかもその男からさほど愛されずに終わった女——。そんな「置き捨てられた女」だと思っているからこそ、夕霧はかくも酷薄な言動ができるのである。

これまで穏健な「まめ人」として描かれてきた夕霧が、女二宮への恋を経て、高木和子の言を借りれば「女に執着する人物」「行為する人に変貌」(18)する。つまり、一人の人物の有様が全く変わってしまうほどの激しい何かが、女二宮への恋にはあつたのだ。柏木への微妙なコンプレックス。そして、その柏木が「置き捨てた女」に対する侮蔑交じりの酷薄な欲望——。女二宮邸に居座り、押しの一手で迫っていく夕霧の「かくさへひたぶるなる」(「夕霧」④480頁)姿は、彼の男としての意地を感じさせる。柏木がろくに顧みもしなかった女に拒まれて終わるなど、とてもプライドが許さなかつたのだ。いわば「何としてでもこの置き捨てられた女を手に入れなければ」という彼の自尊心をかけた熱い衝動が、「まめ人」であつた彼を「女に執着する人物」へと変えたのである。もちろん、それが妻(雲井雁)の気持ちをいたく傷つけ、信頼を大きく損なせたのは言うまでもないことであつた。

おわりに

さて、ここまで本稿では「若菜」巻以降の第二部世界における男たちの欲望行為を3つ見てきた。男たちはそれぞれ自己の評判を大きく毀損させながら、何とかその欲望を達成せんと躍起になっていた。

これらの考察から、第二部における欲望の正体が見えてきたのではないか。それは別の男によって「置き捨てられた女」に対して生起する、これまでの自己を損なうような激しい衝動である。彼らには「置き捨てた男」への複雑な感情がある。光源氏には「朱雀院に対する対抗心」(19)がある一方、「まめやかなる方」(「若菜上」④49頁)夕霧への対抗意識も伏在していた。同様にその光源氏を柏木が、その柏木を夕霧が、それぞれ強烈に意識している(20)。そのうえで、その男が顧みない(と思ひ込んだ)女に欲望を掻き立てられていくのであつた。

もちろんこれは続く宇治十帖における欲望と密接に関係するものだろうし、これ自体が『源氏物語』の描く欲望の形でもあるだろう。物語前半部(第一部)でも様々な欲望の有り様が主に三角関係を通して語られてきた。ただ、欲望とは必ずしも他者が求め、他者が欲する対象だけに生起するのではない。それとは裏腹に他者が(一度手に入れたものの)顧みなくなったものにも人はそそられることがある。そうした皮肉なメカニズムをこの物語は露わにしようとしている。

『源氏物語』第二部は、そのメカニズムの中で自己を毀損していく男たちが描かれる世界であった。他者への過剰な意識が欲望となり、その欲望によって自らを毀損していく男たち。源氏物語はまた新たな欲望の有り様を見出したと言える。

「欲望のカタログ」とも言うべき『源氏物語』。この物語は第二部で新しい欲望の有り様を描き、宇治十帖へ向けてさらにその目を透徹せんとしているのである。

注

- (1) 神田龍身「分身、差異への欲望」（『物語文学、その解体』有精堂 1992）。神田はこの語りを取り上げ、薫への嫉妬やコンプレックスから、浮舟の欲望の虜になった匂宮は「なんてこともない女に夢中になっていると揶揄されている」とし、男たちは「浮舟ごときのために常軌を逸して張り合っている」と指摘する。
- (2) 小林茂美「源典侍物語の伝承構造論」（『源氏物語論序説—王朝の文学と伝承構造 I—』桜楓社 1976）、鈴木日出男「源典侍と光源氏」（『源氏物語虚構論』東京大学出版会 2003）、小嶋菜温子「源典侍と朧月夜—催馬楽を超えて—」（『光源氏と源典侍—神楽歌から—』有精堂 1995）など。
- (3) 田畑千恵子「源典侍」（『物語を織りなす人々 源氏物語講座 2』勉誠社 1991）、岡部明日香「源典侍における老いと好色について」（『人物で読む源氏物語 朧月夜・源典侍』勉誠出版 2005）。なお岡部は源典侍の物語を「単なる挿話ではなく、やはり物語の流れの中に定位されるべき笑話」と論じる。
- (4) 倉田実「源典侍物語の意味 —「典侍」の職掌から—」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識 22 紅葉賀・花宴』至文堂 2002）
- (5) 高橋和夫「紅葉賀・葵の両巻のある部分について」（『源氏物語の主題と構想』桜楓社 1966）。また『新編日本古典文学全集』の頭注でも「物語としては、色どりとしての挿話の趣であろう」（① 347 頁）とある。
- (6) 一方で、三谷邦明は「この源典侍物語がはたしている機構を理解できないならば、多分『源氏物語』第一部の核である須磨流離の問題さえも見失われてしまう」「孤立した挿話ではなく、逆に種々な経緯によって織られた物語である」と論じる（「源典侍物語の構造—織物性あるいは藤壺事件と朧月夜事件—」『源氏物語の世界 第二集』有斐閣 1980 のち『物語文学の方法 II』有精堂 1989）。ただ、この源典侍をめぐる欲望構造それ自体が「第一部の核」に直結するわけではなく、源典侍物語の深刻性はいわば補助線を引いて初めて見えてくるものであろう。
- (7) 拙稿「物語を作る光源氏とその構造をめぐって—虚実入り乱れる六条院」（『記憶』の創生〈物語〉1971-2011』翰林書房 2012）
- (8) 玉鬘と会った右近が、紫の上のところに戻ってきて「かの人をいとめでたし、劣らじと見たてまつれど、思ひなしにや、なほこよなきに」（『玉鬘』③ 119 頁）と思うのは「思ひなし」という留保をつけられる自覚的な「語り手」の「語り」だけに興味深い。さらに光源氏も玉鬘に想いを抱きながらも、一方では冷静に「春の上の御おぼえに並ぶばかりは、我が心ながらえあるまじく思し知りたり」（『常夏』③ 234 頁）と紫の上と同列には愛し得ない自らの心を見通している。
- (9) 梅野きみ子はこの朧月夜との行為の意味を「紫上をして源氏への不信感を、否、作者紫式部をして男性

への不信感を、助長するところにあるのではなからうか」とする（「六条御息所と朧月夜の君」『源氏物語の探究 第八輯』風間書房 1980）。武原弘もこの行為によって「源氏と紫上の仲の亀裂が決定的に深まっていく」（『朧月夜論—その人物像再把握の試み—』『日本文学研究』23 1987,11）ことを読み取る。また、神田龍身は「光源氏物語から宇治十帖へ」（『源氏物語＝性の迷宮へ』講談社 2001）でこの行為を「人生に疲れた厚化粧の中年カップルの退廃的情事」と評し、「紫の上の冷ややかな態度に苦慮せねばならない」源氏を指摘する。

- (10) 大朝雄二「源氏物語の構造についての試論」（『日本文学研究資料叢書源氏物語 III』有精堂 1971）。大朝は「源氏は現在の朧月夜そのものへ執着するというのではなく、朧月夜を媒材として昔を今に呼び戻したいといった、それ自体が不毛であり、またそれゆえに極めて主情的な情念に駆られているにすぎない」と述べる。光源氏は朧月夜自体に執着しているわけではないこと、全くその通りであろう。妥当な見解である。
- (11) 『新編全集』の頭注も「彼の宮への激しい執着にも主観的にはそれなりの理由があったといわねばならぬ」（④ 136 頁）とする。
- (12) ここからは「情報」が実に主観的なものであることがよく分かる。時に人は、あくまで都合のいい情報のみを受け取り、それで自分にはよく知っていると思いきむ。柏木も「女三宮は光源氏から愛されていない」という情報のみ耳に入れ、それ以外の情報は友の諫めも意に介さず、さらにそんな自分に全く無自覚である。
- (13) 西原志保『『源氏物語』女三の宮の〈内面〉』（新典社 2017）
- (14) 『新編全集』④ 317 頁頭注。
- (15) もちろん第一部における光源氏と頭中将との関係にその萌芽は見られるわけだが、光源氏と頭中将の三角関係は、夕顔のように表面化してこないか、源典侍のように戯画化されるかである。女をめぐる本格的な闘争が宇治十帖に向けて、第二部から少しずつ用意されていると見ることができようか。
- (16) 例えば、与謝野晶子はこの箇所を「同情の念がいつかその方を恋しく思う心が変わってゆくのを自ら認めるようになった大将」（与謝野晶子『全訳 源氏物語 四』角川書店 2008）と訳す。
- (17) 拙稿『『源氏物語』の寡婦たち—王朝物語史における「寡婦」の系譜—』（『源氏物語〈読み〉の交響Ⅲ』新典社 2020）
- (18) 高木和子「夕霧」（『源氏物語事典』大和書房 2002）
- (19) 平林優子「若菜巻の朧月夜と光源氏」（『東京女子大学紀要論集』62 2011,3）。なお、桑原利枝も「若菜巻における朧月夜物語の方法——源氏の〈危機〉とのかかわりから」（『平安朝文学研究』4 1995,12）で「朱雀勢力へのいどみ」を源氏の心内に読み取る。
- (20) つまり、ちょうどこの三人が「さんすくみ」の構造になっていることは見逃せない。当初、夕霧の存在で始まった光源氏の欲望が柏木の欲望を喚起し、さらにその柏木の姿によって夕霧の欲望が喚起されていく。この三人の巡り巡る欲望が、第二部世界の核となっていると言っても過言ではあるまい。